

## 第23回国際日本学シンポジウム 近代日本と北欧・ドイツ—文学・宗教・ナショナリズム—

【総括】

田 中 琢 三\*

2021年7月3日（土）の午後に開催された本シンポジウムは、従来の「国際日本学シンポジウム」とは異なる新しい試みがふたつあった。ひとつは新型コロナウイルスの流行の影響によりZoomを利用したオンラインの開催になったことである。私個人としてもオンラインによるシンポジウムに携わるのは初めてのことであり、当日の進行においても常に手探りで不安な状態であった。しかし、比較日本学教育研究部門の事務局の方々や関係する先生方のご協力のおかげで、大きなトラブルもなく終えることができたのはとても喜ばしいことであった。

もうひとつの新しい試みは、日本と北欧・ドイツの関係を中心的なテーマとして取り上げたことである。特に北欧に関しては、我が国ではアメリカやフランスなどに比べるとなじみが薄く、研究対象として取り上げられることも少ないように思われるが、北欧の思想や社会のあり方が、明治以降の日本にとってひとつのモデルとなっていたことは間違いない。したがって我が国における北欧の影響に注目し、それを検討することは、日本の近代とは何かを考察するうえで有意義な試みだと考えられる。

本シンポジウムは、「明治・大正期の日独思想・文化交流の多角的研究：北欧作家ラーゲルレーヴを媒介に」という課題名でJSPS科研費（JP19K00532）の助成を受けている共同研究の成果の基づくものである。この共同研究では、スウェーデ

ンの作家ラーゲルレーヴの日本における受容とそれに関連する作家や思想家たちを中心的に取り上げて、日本と北欧・ドイツの文化的・思想的交流を調査するものだが、今回のシンポジウムでは、特にキリスト教とナショナリズムの問題に焦点をあて、我が国と北ヨーロッパの影響関係を検討することを目的とした。この日の講演や発表の詳しい内容は、本年報に掲載されている論文を参照していただくとして、以下では、これらの研究報告の概要を手短かに紹介していきたい。

本シンポジウムでは、まず部門長の神田由築先生とグローバルリーダーシップ研究所長の小林誠先生によるご挨拶の後、南山大学のエスベン・ペーターセン氏による基調講演「近代日本における新神学とそのパラドクス」が行われた。「新神学」とは一般に「自由主義神学」と呼ばれるドイツで生まれた近代的な神学であり、19世紀末に我が国に伝えられ、日本のキリスト教思想に大きな影響を与えたとされる。ペーターセン氏によると、自由主義神学をめぐるドイツと日本に共通のパラドクスが見いだせるという。それは宗教的にはリベラルであるのに、政治的・社会的には決してリベラルではないということで、実際にドイツでは自由主義神学者の多くがナチスを支持し、日本においても「新神学」を受容したキリスト教者は国家主義者となった。ペーターセン氏はこのパラドクスが生じた要因のひとつは、個人的な宗教体験に基づくがゆえに宗教的共同体を形成できなかった自由主義神学者たちが、国家という別の共同体に統合されていったことにあると説明した。

\*お茶の水女子大学・准教授

この指摘は、近代におけるキリスト教とナショナリズムの結びつきという問題に、神学思想の観点から新しい光を当てるものであり、その意味で極めて興味深い講演であった。

続いて、都留文科大学の加藤敦子氏による発表「近世演劇における「キリシタン」と日本意識」が行われた。加藤氏は江戸期の仮名草子やその影響を受けた浄瑠璃や歌舞伎における「キリシタン」の表象を検討し、この時代に特徴的な謀反人としての「キリシタン」のイメージは、日本を脅かす東アジア諸国のそれと重なるものであり、日本型華夷秩序の意識化にほかならないことを指摘した。この発表は、近世におけるキリスト教のイメージを通して近代日本のナショナリズムの萌芽を探るという独創的な内容の研究報告であった。

ついで私が「内村鑑三『デンマーク国の話』における信仰・農業・愛国主義」と題する発表を行った。この研究報告は、内村における愛国主義とキリスト教信仰の関係性を、植林をテーマにした講演録『デンマーク国の話』にみられる農本主義の思想を手がかりに再検討したものである。本発表は、比較の対象としてジャン・ジオノの小説『木を植えた男』や近代フランスのナショナリズムを取り上げながら、内村の愛国主義においては、彼が講演で語ったデンマークの姿がそうであるように、小国でありながら信仰と農業を基盤とする平和主義的な国が理想とされていることを示すものであった。

その後、東京理科大学の中丸禎子氏による発表「フォルケホイスコーレ「国民高等学校と満蒙開拓—加藤完治と賀川豊彦のデンマーク受容—」」が行われた。中丸氏は、デンマークの農民教育機関「フォルケホイスコーレ」の影響を受けて日本の農業学校の設立に尽力した加藤完次と賀川豊彦に注目し、彼らが行った満蒙開拓が北歐思想の受容とどのような関係にあるのかを検討した。中丸氏によると、キリスト教精神を持った加藤や賀川は農民の教育や土地の開墾によって民衆の生活の向上や国家の発展を目指

したのであり、それはフォルケホイスコーレの理念と合致するものであった。発表の結論部では、善意に基づいてはいるが、現実には侵略行為でもあった彼らの活動をどのように評価すべきなのかという研究者にとって難しい問題が提起され、深く考えさせられるものがあった。

最後に千葉大学の兼岡理恵氏が「W.グンデルトの日本学—キリスト教から神道、そして文学—」と題した発表を行った。兼岡氏は、ドイツの日本学者ヴィルヘルム・グンデルトを取り上げ、その能楽研究を手がかりに、宣教師であり内村鑑三と交流もあったグンデルトが神道や禅をどのように理解していたのかを考察した。注目すべきは、グンデルトが日本人の信仰の根源にキリスト教と同じ「宗教の本質」つまり「神的なるもの」を見出していたことである。このようなグンデルトの神秘主義的な思想が、後年の彼のナチズムへの協力とどのように関係しているのかという問題は、面白いテーマになりうるのではないかと思われた。

これらの発表の後に登壇者全員によるパネルディスカッションが行われ、Zoomのチャット機能を用いて参加者からいただいた質問をもとに活発な議論が交わされた。

本シンポジウムにおける講演や発表の内容は、登壇した先生方の専門分野の相違を反映して多様なものとなり、全体的に統一性があまり感じられないという面もあったと思われる。しかし、日本や北歐・ドイツに関する事象を扱いながら、おもに近代におけるキリスト教とナショナリズムの親和性について、さまざまな観点からアプローチできたことが、このシンポジウムの新しさであり最大の成果であるともいえるだろう。また、別々の時代を扱っていながら、ある発表において、思わぬところで別の発表とのつながりが発見されるということも少なからずあり、知的刺激に満ちた充実したシンポジウムとなった。

最後になり恐縮であるが、本シンポジウムの準備や運営にご尽力をいただいた方々、そしてお忙

しい中に参加していただいた皆様には、この場を  
借りてお礼を申し上げたい。